九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「こをろ」年表（初稿）

花田，俊典
九州大学大学院比較社会文化研究院教授

https://doi.org/10.15017/8981

出版情報：文獻探究. 40, pp.11-30, 2002-08-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

「こをろ」年表（初稿）

花田俊典

年	月	事項	同人（友達）消息	関連事項
1939年 昭和14年	4月	この頃、矢山哲治と眞鍋呉夫が、川上一雄（注1）の仲介により福岡市東中洲の茶房「メトロ」で初対面。	島尾敏雄、長崎高商を卒業後、同校の海外貿易科に進学。矢山哲治、福高理甲から九大農学部に進学。眞鍋呉夫、日立製作所福岡営業所に就職。鳥井平一（注2）、福高文乙から東大法学部、佐藤昌康（注3）、福高理甲から東大医学部に進学。安河内剛（注4）、東北大理学部に進学。大野克郎、福高理甲から九大工学部に進学。久保山巍、福高理甲から九大工学部に進学。小山俊一（注5）、福高理乙から九大農学部に進学。冨士本啓示（注6）、長崎高商から九大法文学部に進学。	5日、映画法公布。 12日、米穀配給統制法公布。この月、前年度福高文乙入学の伊達得夫（注7）、キャンパス内の学而寮を出て、学校裏手の陸軍墓地傍の家（市内靖国町384荻野政朋方）に下宿。
	5月		7日（日）、矢山哲治、九大仏教青年会付属日曜学校の子どもたちを引率し、郊外の名島海岸に遠足（※矢山哲治、昭14・5・10鳥井平一宛書簡）。	11日、ノモンハンで日・ソ両軍が武力衝突。
	6月			16日、国民精神総動員委員会、パーマネント廃止など生活刷新案を提言。

年月	事項	同人（友達）消息	関連事項
7月	2日(日)、矢山哲治、学生5名で九大の動物学演習のため天草・長崎・大村へ研修旅行。長崎市滞在中の6日、島尾敏雄・川上一雄・星加輝光(注8)・囲時夫と劇場「中座」前の喫茶店「千加良」で歓談。9日夜、帰福。この頃、矢山哲治、福岡市内で旧知の廣瀬信子(注9)と出会い、同行の山崎邦栄(注10)を紹介される。	23日(日)、島尾敏雄、大阪毎日新聞社(現・毎日新聞社)主催のフィリピン派遣学生使節団に参加し、8月17日(木)帰国。	8日、国民徴用令公布、15日施行。
8月	1日(火)、矢山哲治・吉岡達一・安河内剛・鈴木真(注11)・鳥井平一・佐藤昌康・横倉弘吉ら福岡高校同窓生と、山崎邦栄・廣瀬信子ら女友達と一緒に名島(なじま)海岸に遊び(※近藤洋太「年譜」、『矢山哲治全集』)、以後も折々に集団交際する。女性グループは、山崎邦栄・廣瀬信子らの県立福岡高等女学校(現・福岡中央高校)の同窓生―安永(現姓・柏崎)妙子(注12)・松丸静子・岡本咲子・梶本富子と、邦栄の妹の山崎(現姓・岩永)邦歌らの私立福岡女学校(現・福岡女学院中学・高校)の同窓生―秋根美代子(注13)・寺野久子・原田信子・久我(現姓・眞鍋)正子(注14)・田中幸代・井上みゆきら。この頃、眞鍋呉夫、矢山哲治に誘われて長崎高商の島尾敏雄と県庁前の喫茶店「フリー」で初対面。21日(日)、矢山哲治ら「男友達10人、女友達16人と」(矢山哲治、昭14・8・22田中稲城宛書簡)糸島郡長垂(ながたれ)海岸に海水浴に行き、終日過ごす。23日(水)夜7時、市内東中洲の喫茶店「ブラジレイロ」2階で同人の第1回顔合せ会。出席者は原田義道(注15)・吉岡達一・原田和夫・川上一雄・小山俊一・久保山魏・山下米蔵(米三)・内村亨・眞鍋呉夫・矢山哲治。午後9時30分閉会。28日(月)、冨士本啓示の仲介で旧「銀箭」(注16)同人の藤三男(日本鋼管KK)・上妻善一(国際運輸KK)・三浦愛夫(九州水力)・志佐正人(在・京城)が同人参加。「銀箭」は長崎高商系の未刊の同人誌。冨士本啓示・星加輝光・囲時夫の3人は既参加(※「こおろ通信」第1号)。		長谷健「あさくさの子供」で第9回芥川賞。11日、火野葦平『花と兵隊』(改造社)。28日、青柳喜兵衛詩画集『牛乳の歌』(とらんしっと詩社)。
9月	1日(金)午後、冨士本啓示・矢山哲治の2名、「三光社印刷所」(福岡市長浜町4丁目1)に出向き、新雑誌の印刷を依頼、快諾を得る。2色刷表紙込み1頁1銭(※なお第2号は市内上名島町53「福岡印刷株式会社」、第3号以降は福岡市因幡町34「九州印刷株式会社」に依頼)。2日夕刻、鈴木真・矢山哲治・冨士本啓示の3名、「科学評論」(科学文化協会―福岡市中島町9)編集者の吉岡修一郎(昭和9年九大法文学部哲学専攻卒)を訪ね、現今の雑誌統制事情などを質問。18日(月)、創刊号の原稿締切、集まりは悪かったが編集作業に入る。19日、矢山哲治・眞鍋呉夫、三光社印刷所主の赤松顕三と面談し、印刷費・納期などのアウトラインを取り決め。20日、矢山哲治、編集割付完了し、印刷所に入稿。26日(火)、印刷所に校正を催促、一部出校。この月、「こおろ通信」第1号(注17)発行。「住所録」を付載。全35名。うち、福岡市在住者18名、福岡県内(糟屋郡箱崎町・浮羽郡羽犬塚町・門司市)4名、長崎市3名、東京市2名、仙台市・川崎市・京都市・神戸市・広島市・京城府・北京市、各1名、出征中1名(注18)。	10日(日)、矢山哲治、戦地から帰還する火野葦平を九州文学同人の矢野朗や原田種夫らと雁ノ巣飛行場に迎えに行き、初対面(矢山哲治「火野先生」、「こをろ」第9号、昭16・9)、のち市内で火野葦平を囲んで中山省三郎らと宴会。月末、矢山哲治、「九州文学」同人を辞退。	1日、ドイツ軍、ポーランド侵攻(第二次世界大戦開始)。

		1940年 昭和15年			
10月	11月	12月	1月	2月	3月
2日(月)午前、矢山哲治、警察署へ出頭面談し、新雑誌創刊の諒解を得る(注19)。3日、上妻善一、北京より熊本に帰郷の途次、福岡市に2泊し、矢山哲治・冨士本啓示・眞鍋呉夫と「川丈」「メトロ」で遊興。5日、矢山哲治・冨士本啓示・眞鍋呉夫、三光社印刷所で出張校正し、校了。7日夕刻、「こをろ」創刊号納本(矢山哲治、昭14・10・8鳥井平一宛書簡)。10日(火)、**「こおろ」創刊号発行**。編輯兼発行人は加野錦平(福岡市春吉花園16%)。発行所は福岡市大濠町156眞鍋呉夫方「こおろ発行所」。全83頁。巻頭に「古事記」の一節を掲げ、巻末頁「創刊のことば」に、「こおろ。これより若く、新しい言葉を知らない」とある。11日(水)、寄贈分発送。12日、眞鍋呉夫の出勤中(日立製作所)に特高刑事3人が自宅(福岡市大濠町一五六「こおろ発行所」)に来て、創刊号掲載の川上一雄の小説「一ツの関」の削除を命令(注20)。「ジイドの日記引用の一部がいけなかつたとのこと」(「こをろ通信」第2号)。13日午前、矢山哲治、削除の件に関して「中村刑事」と折衝、大過なく落着。同日、在福同人会を「ブラジレイロ」2階で開催。16日(月)、矢山哲治・内村亨・山下米蔵(米三)・後藤健次・眞鍋呉夫、「こおろ発行所」(眞鍋宅)に集まり、「こおろ通信」その他会計整理の作業。当日は雨。この月、「こおろ通信」第2号発行。		4日(木)、広島高校の阿川弘之(広島出身の吉岡達一と小学校以来の友人)が来福し、在福同人と歓談。6日(土)、矢山哲治・阿川弘之・矢山哲治・鳥井平一・鈴木真・吉岡達一・山崎邦栄・山崎邦歌・久我正子・田中幸代ら、背振山方面に「遠足」(※予定、矢山哲治、昭15・1・4書簡)。後日、阿川弘之・吉岡達一・眞鍋呉夫、雲仙・長崎に旅行。8日、当局の達しにより「こおろ」存続決定。「この前の通信で御承知の通り、はからずも鋏禍にあひ、たまたま中央からの指令で、福岡地区の娯楽雑誌、同人雑誌、小新聞紙の整理が始まつてゐて、当局から「こおろ」も当分の停刊を勧告され、再度の指令を待てとの事でありました。が、今月八日、当局の方がわざ〳〵眞鍋呉夫を訪ねて再刊を承認して下さいました」(「こおろ通信」第3号)。	15日(木)、矢山哲治ら、「こをろ」第2号編輯(※矢山哲治「肉体の秋」矢野朗氏出版記念会、「こおろ」第2号、昭15・3)。	3日(日)、「奈多にpicnicするさうだが、僕は英彦山に雪のシヤシンをとりにゆくので。」
			19日(木)夕刻、矢山哲治、「こおろ」創刊号を持って福岡市を発ち、下関駅午後10時30分発の急行で上京。途中、神戸・大阪・京都に寄り、24日、東京着。在京同人と交歓。仙台から上京した安河内剛と一緒に元「九州文学」同人で旧知の松原一枝宅(中野区桃園町)に宿泊。翌月7日、帰福。		
		2日(土)、矢山哲治、火野葦平帰還歓迎会に出席。この頃、三浦愛夫、島根県某連隊に入隊後、病疾のため帰郷して静養中。	10日、中村健次(注21)、下関重砲兵連隊に入隊し、第六中隊第一班に配属。中旬、矢山哲治、九大気象学教室による静岡大火災の調査に同行し、その後、上京。松原一枝宅に滞在し、仙台・京都・広島と立ち寄って、2月2日夜、帰福。	10日(水)、火野葦平の朝日文化賞受賞祝賀会、小倉市で開催。17日、長谷健『あさくさの子供』(改造社)。	3日(土)、矢野朗『肉体の秋』出版記念会、ブラジレイロで開催。	4日、川崎寿美男、応召。

年月	事項	同人（友達）消息	関連事項
	（矢山哲治、昭15・3・1鳥井平一宛書簡）。25日（月）、**「こおろ」第2号**発行。全94頁。編輯兼発行人・発行所とも創刊号に同じ。		
4月	27日（土）、「ブラジレイロ」で在福同人会開催。この月から猪城博之（福岡高校）（注22）・古賀正三（九大農学部）・原介夫（九大医学部）・平山吉璋（長崎高商）・福田正次郎（福岡高校）（注23）・船津純彦（九大医学部）・守島治（京大法学部）・岩井敏光（時計業）が同人参加。同人費を月3円から2円に改訂。27日（土）、「福岡同人会」を「ブラジレイロ」2階で開催。出席者は猪城博之・古賀正三・川上一雄・冨士本啓示・小山俊一・加野錦平・村橋多真雄・原田義道・矢山哲治・眞鍋呉夫・島尾敏雄・原介夫・船津純彦・鈴木真・山下米蔵。月末、「こおろ通信」第3号発行。同号に「住所録」（注24）付載。	島尾敏雄、長崎高商から九州帝大法文学部経済科に、吉岡達一、福高理乙から東大農学部林学科に（のち仏文に転科）、阿川弘之、広島高校から東大文学部国文科に、田尻啓（注25）、福高理甲から九大工学部に、船津純彦、福高理乙から九大医学部に進学。横倉弘吉（九大医学部）、福岡市東薬院2番22号に転居。安河内剛（東北大理学部）、仙台市肴町63今野幸治郎方に転居。	1日、福岡県令改正し、料理飲食店の営業は午後11時まで。森澄雄、長崎高商から九州帝大法文学部経済科に進学。20日、火野葦平ら5名、第1回福日文化賞受賞式。同日、秋山六郎兵衛『故園』（三笠書房）。
5月	5日（日）、第3号原稿締切。10日（金）、編輯日。会計は川上一雄（福岡市馬場頭六三二番地）が担当。眞鍋呉夫の母親（眞鍋おり）が営む市内片土居新道の喫茶店「木靴」（のち「門」と改名）を会場に同人集会「水曜会」を結成し、毎週水曜日午後7時に参集。「尚、ノートを一冊女の子に預けておきますから利用して下さい」（「こおろ通信」第4号）。下旬、第3号原稿の編輯割付を済ませて印刷所に入稿したが、「昨今の印刷界状態の下に於ては、頁物の文芸誌等を引受けることは面倒だと、仲々話まとまらず、余儀なく遅延」（「こおろ通信」第5号）、その後、九州印刷㈱と交渉し、今後の印刷を依頼。この月、水津幸男（国際運輸KK、在北京）、同人参加。「こおろ通信」第4号発行。	星加輝光、東京市王子区王子11の10小林方に転居。藤三男、東京市麹町区丸ノ内1の2の1大川田中ビル日本鋼管KK販売部に住所変更。囲時夫、東京市日本橋区呉服橋1丁目3の14安田信託KK企画課に住所変更。村橋多真雄、八幡市園田町1丁目新原新太郎方に転居。28-30日、矢山哲治・島尾敏雄・眞鍋呉夫、玄界島に旅行。	
6月	10日（月）、福岡印刷㈱の仕事が捗らず九州印刷㈱に変更。15日（土）、囲時夫（長崎高商）が上京の途次来福し、矢山哲治・眞鍋呉夫・島尾敏雄・川上一雄・冨士本啓示と歓談。この月、「こおろ通信」第5号発行。	上旬、島尾敏雄の父・妹2人が神戸から来福し、矢山哲治らが案内。	「九州文学」6月号発禁。
7月	15日（月）、「こをろ」第4号原稿締切。17日（水）、阿川弘之、小説「初恋」の原稿を携えて来福。二日後（※眞鍋呉夫「つかのまの春」）、仲間で油山へピクニック。阿川弘之はその後、満州旅行へ。28日（日）、**「こおろ」第3号発行**。編輯兼発行人は眞鍋呉夫、発行所は福岡市高宮本町58（眞鍋呉夫方）「こおろ発行所」。全93頁、400部。30日（火）、同人に発送。この月、田尻啓・土師二三生（注26）、同人参加。	眞鍋呉夫・内村亨・岩井敏光、徴兵検査を受け第3乙種合格。鈴木真、渡満。古賀正三、渡鮮。百田耕三（注27）、戦地から一時帰還。	6日、奢侈品等製造販売制限規則公布（翌日施行）。「九州文学」7月号発禁。10日、長谷健『火のくにの子供』（モナス）。
8月	2日（金）、「こおろ」第3号掲載の眞鍋呉夫の小説「野良犬物語」が風俗壊乱のため当	8日、中村健次（神戸市・石原産業）、陸	1日、小倉城内に西

局より発行停止命令を受け、翌3日朝、福岡署特高係員が来て発禁申し渡し。ただちに矢山哲治・川上一雄・鳥井平一、福岡署に出向く。印刷所に預置中の第3号250部没収。この頃、「同人通信」発行。11日(日)、同人遠足会(※ただし「同人通信」の予告による、午前10時今川橋に集合し、長垂・今宿付近を行楽、弁当・海水着持参、雨天の場合は次週に延期)。15日(木)、第4号原稿締切。下旬、「こをろ」第4号、川上一雄宅にて編輯(注28)。

9月

4日(水)、「こをろ」第4号掲載予定の阿川弘之の小説「初恋」、県特高課の査読で掲載不許可。15日(日)午後6時から、在福同人会を市内東中洲の「明治製菓」3階で開催。出席者は川上一雄・後藤健次・内村亨・古賀正三・田尻啓・山下米蔵・猪城博之・福田正次郎・大野克郎・島尾敏雄・冨士本啓示・鈴木真・加野錦平・村橋多真雄・古賀政久・川崎寿美男・矢山哲治・眞鍋呉夫の計19名。午後9時30分散会。28日、**「こをろ」第4号発行**。今号より「こをろ」と改題(※阿川弘之「『こをろ』について」、「こをろ」第5号参照)。編輯担当は川上一雄。編輯兼発行人・発行所は前号に同じ。全85頁。巻頭言「一周年の言葉」に、「私達、昭和の子らは、新体制へ欣然として参与致します」とあり、「編輯後記」に「四号を送り出すに当つて、阿川の小説が載せられないやうになつたことは残念ではあるが、僕等はそれによつてより深い反省の機会を与へられたことを忘れてはならない。事実それは此の号の巻頭言となつて現れた」とある。同人間の話し合いにより「代行同人会」を設置、在福同人互選の10名程度で編輯運営実務を担当。こをろ北京支部(上妻善一・水津幸男・中野睦夫)、および東京支部(阿川弘之・囲時夫・鳥井平一・中村健次・原田和夫・藤三男・星加輝光・吉岡達一)を結成。29日(日)、第1回東京(在京)同人会を日比谷の「美松」で正午から開催。阿川弘之・佐藤昌康・中村健次・藤三男・鳥井平一・吉岡達一が参加。スキヤキ鍋を囲み歓談し、中村健次が陸軍経理学校へ戻ったあと、銀座2丁目「カネボウ」5階で談話、さらに銀座裏「銀たこ」で酒、「ミュンヘン」でビール、同夜は荻窪の阿川弘之の下宿に5人で宿泊(※「こをろ通信」第7号)。千々和久彌(福岡高校)(注29)・松井太一(九大医学部)・小見山里子(九大仏文)・佐藤昌康(東大医学部)が同人参加。玉井千博(注30)・小島直記・小石喜三太は参加予定。

10月

20日(日)、第5号原稿締切。「こをろ通信」第7号発行。21日(土)、同人編輯会(※矢山哲治、昭15・10・22鳥井平一宛書簡)。月末、「こをろ通信」第8号(4号同人批判抄)発行。

11月

3日(日)、矢山哲治、上京して在京同人と交流し、10日(日)帰福。中村健次(陸軍経理学校在学中)の日記に「十一月三日、日曜日(晴)九時、明治節奉祝式終了後、外出。福岡ヨ

部軍司令部創設。

軍経理学校甲種幹部候補生試験に合格し、上京。北京の中野睦夫、病気のため帰省。川崎寿美男、除隊。猪城博之、五箇庄(熊本県)旅行。土師二三生、大阪市北区堂島上2丁目大阪毎日新聞東亜部に住所変更。

25日、矢山哲治、第2詩集『友達』(詩集友達刊行会)上梓。この頃、後藤健次、福岡市大浜町4丁目58に転居。病気で一時帰省中の中野睦夫、久留米市国分町八軒家1654ノ6に転居。中村健次、東京市牛込区若松町陸軍経理学校幹候第一中隊第三区隊に住所変更。矢山哲治、市内薬院中溝町二ノ三城野方に転居。眞鍋呉夫、市内高宮本町58に転居。

囲時夫、東京から福岡市に転任。新住所は福岡市川端町十七銀行ビル3階安田信託ＫＫ。土師二三生、中旬頃に東京転勤。

12日、大政翼賛会結成。31日、東京のダンスホール閉鎖。

2日、大日本帝国国民服令公布。10日、紀

年	月	事項	同人（友達）消息	関連事項
	12月			
1941年 昭和16年	1月	リ幼友達、矢山哲治上京セルニツキ、荻窪の鳥井(平一)、吉岡(達一)、佐藤兄ト共ニ歓談。八時十分帰校」とある(中村健次『私の青春アルバム』)。この頃、眞鍋呉夫・島尾敏雄・秋根美代子・久我正子ら、若杉山へハイキング(※眞鍋呉夫「美しかった日に」)。 5日(木)、**「こをろ」第5号発行**。編輯担当は小山俊一。編輯兼発行人・発行所は前号に同じ。全124頁、500部。7日(土)、「こをろ」発送作業後、矢山哲治、眞鍋呉夫宅に宿泊。14日(土)、矢山哲治・小山俊一・原介夫・鈴木真、市内の喫茶「木靴」で「こをろ」の新体制を協議(※矢山哲治、昭和15・12・14鳥井平一宛書簡)。15日(日)午後6時、「福岡同人会」を市内東中洲「明治製菓店」で開催。当番は矢山哲治。「こをろ」の新体制を討議し、紛糾。出席者は矢山哲治・島尾敏雄・古賀正三・冨士本啓示・小見山里子・松井太一・眞鍋呉夫・田尻啓・海法昌裕(かいほうよしひろ)・山下米蔵・一丸章・岩井敏光・藤ふみ子・鈴木真・小山俊一・加野錦平・囲時夫(かこい)・後藤健次・船津純彦・原介夫(はらすけお)・川上一雄の計21人。21日(土)午後6時、福岡同人会を「ブラジレイロ」で開催。出席者は前回の21名および福田正次郎・千々和久彌・村橋多真雄(竹中工務店)・大野克郎(九大工学部)。24日(火)、有志同人会を福岡市春吉一番町の「トンカツとビステキ(ママ)」の店「シラツチ」(2階に小宴会場あり)で開催。解散意見の矢山哲治らと、存続意見の川上一雄らが対立。結果、12月末日を以て「こをろ」解散を決定。この月の下旬、「こをろ通信」第9号発行。「こをろ同人名簿」付載。28日、喫茶店「門」に来合わせた矢山哲治と川上一雄が口論し、殴り合いの喧嘩になって絶交(※矢山哲治、昭和15・12・30川上一雄宛書簡)。 初旬、糸島海岸の箱島(糸島郡二丈町大字浜窪)の料理屋「此ノ里」で矢山哲治詩集『友達』出版記念会(※眞鍋呉夫「美しかった日に」)。25日(土)、市内浜田町の山崎邦栄・邦歌宅で、1月25日生まれの眞鍋呉夫・山崎邦歌および同月29日生まれの久我正子の合同誕生会を開催。矢山哲治も出席、邦栄は神戸に嫁いだ姉・邦子の出産の手伝いに行って留守(3月中旬帰福)。同日夕刻、「こをろ結成会」を東中洲「明治製菓店」で開催。参加者は17名。島尾敏雄が司会を担当し、趣旨・規約を論議。会場を「ブラジレイロ」に移し、衆議一致。同人を「友達」と称し、新生「こをろ」創刊号(通巻6号、新誌名は時局柄困難と判断)を3月上旬に発行する旨を決定。「友達」(同人)は、福岡＝古賀政久・松井太一・山下米蔵・矢山哲治・猪城博之・村橋多真雄・小見山里子・十時賀子・海法昌裕・島尾敏雄・原介夫・大野克郎・冨士本啓示・田尻啓・加野錦平・千々和久彌・眞鍋呉夫、東京＝阿川弘之・佐藤昌康・吉岡達一。経過報告・「趣旨・規約」を掲載した「こをろ通信」第一号発行。31日(金)、尾張町「竹葉亭」にて「東京友達会」を開催。会計係は鳥井平一、連	星加輝光は入営中(久留米西部第50騎兵部隊坪内隊高木班)。一丸章(注31)は療養中(福岡市六月田町66斎藤病院)。島尾敏雄は福岡市地行東町126番地恒屋方、福田正次郎(那珂太郎)は福岡市簀島南小路、矢山哲治は福岡市馬出日本町森方、ついで箱崎昭和町行徳方に転居。	元2600年祝典開催。23日、大日本産業報国会結成。29日、大政翼賛会福岡県支部発足。 24日、西部軍司令部、小倉市から福岡市に移転。 15日、岩下俊作『富島松五郎伝』(小山書店)。

絡係は吉岡達一と申し合わせ。出席者は阿川弘之・佐藤昌康・鳥井平一・土師二三生・藤三男・吉岡達一。

2月

20日(木)、新生「こをろ」創刊号(通巻6号)原稿締切。23日(日)午後、市内の飲食店「シラツチ」で「福岡こをろの会」開催。創刊号の「編輯相談会」。出席者は海法昌裕・古賀政久・小見山里子・島尾敏雄・田尻啓・十時賀子・冨士本啓示・眞鍋呉夫・松井太一・矢山哲治・山下米蔵。新同人として岩井敏光・志佐正人・後藤健次・川崎寿美男・安河内剛・土師二三生・藤三男・吉村朔夫(渡辺鉄工所、山口高商卒、眞鍋呉夫推薦)・山田豊彦(台北帝大文政科、島尾敏雄推薦)。

黒田静男「九州文化協会設立宣言」(「九州文学」)。3日、原田種夫『風塵』(東陽閣)。

3月

1日(土)、「こをろ」第6号原稿を眞鍋呉夫が編輯割付し(島尾敏雄・矢山哲治は手伝い)、「九州印刷株式会社」(福岡市因幡町34)に入稿。2日(日)、矢山哲治・山崎邦歌・安永妙子ら、郊外の奈多海岸に遠足(※矢山哲治、昭和16・3・8鳥井平一宛書簡)。上旬、「こをろ通信」第二号発行。「友達住所録」付載(※所在不明)。28日、**「こをろ」第6号発行**。編輯兼発行人は眞鍋呉夫、発行所は福岡市高宮本町58「こをろ発行所」。全116頁。巻頭に「友達」一覧(計28名)を掲げ、「編輯後記」に「『同人』が『友達』に立ち直つて最初のこをろが出来た」とある。

10日(月)、安河内剛没。11日、家族が仙台に行き火葬し、16日、帰福。この月、中村健次・星加輝光、出征し、第18師団(菊兵団)の一員として門司港から中国へ。

31日、「北九州文化聯盟」発足(会長火野葦平)。

4月

7日(月)、市内東中洲の「生田」(生田菓子舗喫茶部)にて「福岡友達会」開催。出席者は矢山哲治・山下米蔵・後藤健次・眞鍋呉夫・吉岡達一(来福中)・村橋多真雄・田尻啓・山田豊彦(帰省中)・島尾敏雄。古賀政久は上京中、松井太一は奈良旅行、冨士本啓示は長崎旅行中、海法昌裕・小見山里子・千々和久彌は郷里に帰省中、吉村朔夫は病臥中、大野克郎・川崎寿美男・十時賀子は欠席。友達会の席上、原介夫の脱退、上妻善一(国際運輸KK、在・北京、藤三男・矢山哲治推薦)・玉井千博(九大社会学、糟屋郡古賀町中村勉方、眞鍋呉夫推薦)の同人加入は承認、川上一雄(矢山哲治・島尾敏雄・眞鍋呉夫推薦)・小山俊一(松井太一推薦)は「種々なる因果関係随伴し問題はなかなか複雑であ」(「こをろ通信」第三号)るため「今月推薦の議は保留」。眞鍋呉夫が文化学院に入学して上京したため発行所を「福岡市箱崎昭和町行徳方　矢山哲治に」(※「こをろ通信」第三号)。10日(木)午後3時、市内「万行寺」で安河内剛の葬儀。「こをろ」より供花。矢山哲治・吉岡達一・田尻啓・島尾敏雄・冨士本啓示が焼香、矢山哲治が弔辞奉読。25日(金)、九州文化協会主催文芸講演会で講演のため来福した中村地平を誘い、折から帰福中の松原一枝と一緒に矢山哲治・島尾敏雄・福田三千也・某(氏名不詳)、太宰府・観世音寺に遊ぶ(※矢山哲治、昭和16・4・30眞鍋呉夫宛書簡)。この月、「こをろ通信」第三号発行。

伊達得夫(のち書肆ユリイカ社主)、福高文乙から京大経済学部に、福田正次郎(那珂太郎)、福高文乙から東大国文科に、湯川達(達典)、福高文乙から京大文学部に、小島直記、福高文丙から東大経済学部に進学。山下米蔵、福岡市大名町大名アパート93号に、千々和久彌、福岡市靖国町384荻野方に転居。古賀政久、九大法科を卒業し、日本発送電㈱に入社。新住所は東京市杉並区荻窪3丁目205昭明荘。眞鍋呉夫、新住所は杉並区荻窪3丁目179目月荘。村橋多真雄、西南学院高商部入学。島尾敏雄、九大法文学部文科に転科し東洋史学を専攻。中旬、矢山哲治、熊本・宮崎・天草・長崎に旅行。

1日、小学校を国民学校と改組。生活必需物資統制令公布。20日(日)午後2時、「福岡地方文学者聯盟」発会式、市内水茶屋の奉公館にて挙行。矢山哲治・島尾敏雄・村橋多真雄が出席。矢山哲治・島尾敏雄は準備委員、発会式挙行後は委員となる。

年月	事項	同人（友達）消息	関連事項
5月	5日(月)、市内春吉「シラツチ」にて第7号編輯会議。出席者は島尾敏雄・玉井千博・山下米蔵・後藤健次・村橋多真雄・吉村朔夫・大野克郎・海法昌裕・田尻啓・松井太一・矢山哲治・冨士本啓示(欠席者は川崎寿美男・千々和久彌・十時賀子)。新参加の吉村朔夫・玉井千博の紹介。発行所住所を再変更し「福岡市春吉下寺町339ノ2矢山哲治方　こをろ発行所」、ただし実際の編輯事務・発行所は「当分、福岡市箱崎昭和町3150ノ5安松方島尾敏雄気付　こをろ編輯室」(※「こをろ通信」第四号)。「こをろ」第8号の編輯担当者は山下米三(福岡市大名町大名アパート93号)、締切は6月30日と決定。26日(月)、「こをろ」第7号校了。月末、「こをろ通信」第四号発行。	8日(木)、矢山哲治、九大工学部講堂で阿部知二の講演を聴講、座談会に出席。	1日、市内東中洲「清流荘」にて福岡地方文学者聯盟主催の「福岡の文学を語る座談会」開催。25日(日)午後2時、「福岡地方文化聯盟」結成式、「こをろ」同人は不参加。
6月	5日(木)、**「こをろ」第7号発行**。安河内剛追悼特集。編輯兼発行人は矢山哲治、発行所は福岡市春吉下寺町339ノ2矢山方「こをろ発行所」。全96頁。誌面に囲広告「『こをろ友の会』の会員募集のこと」掲載。福田三千也(福岡市多々良村名島2094)、同人(「友達」)参加。7日(土)午後6時、福岡市春吉一番丁「シラツチ」(「シラッチ」)にて「六月友達会」開催。参加者は玉井千博・十時賀子・矢山哲治・松井太一・海法昌裕・千々和久彌・吉村朔夫・後藤健次・山下米三・島尾敏雄・田尻啓・村橋多真雄(欠席者は大野克郎・川崎寿美男・冨士本啓示)。福田三千也の「友達」加入の件、「矢山哲治推薦し、審議し、明晢判明にして後承認」(※「こをろ通信」第五号)。編輯責任者は第8号は山下米三、第9号は村橋多真雄と決定。22日(日)、在京の鈴木真の帰福を機に、「友達」(同人)有志と「娘達(常会の諸嬢)」が油山にピクニック、矢山哲治は市内屋形原(やかたばる)の山火事調査のため欠席(※矢山哲治、昭和16・6・23吉岡達一宛書簡)。29日(日)、東京銀座「きゆうぺる」で「東京友達会」開催。出席者は藤三男・吉岡達一・鳥井平一・眞鍋呉夫(古賀政久は帰省中、土師二三生は渡満準備中、阿川弘之・佐藤昌康は所用のため欠席)。	十時賀子、京城府青葉町3-90に転居。小見山里子、東京市豊島区目白町2-155常磐荘に転居。岩井敏光・吉村朔夫、同人辞退。土師二三生、大毎東京から北京支局に転任。古賀政久、徴兵検査のため帰福し、第一乙種合格。山下米三、第一乙種合格、福岡市二見黒金町72平尾アパート2-18に転居。矢山哲治、春吉下寺町339ノ2に転居。	
7月	1日(火)、「こをろ東京通信」第1号(原題は「こをろ通信臨時第1号」)発行。同日、福岡市内の喫茶店「門」で「こをろ」第8号編輯会議。4日(金)、同前および古賀政久を囲む友達会を「門」2階で開催。5日(土)、割付を終え、「九州印刷」に入稿。9日、「日本出版文化協会」加入のため会費36円を添えて申し込み。下旬(あるいは八月上旬)、島尾兄妹を迎えて油山へピクニック。	土師二三生、応召(福岡県朝倉郡甘木町西部76部隊松本隊藤本隊)。島尾敏雄、末妹の雅江と満洲旅行(奉天に長妹の美江(よしえ)が在住)。下旬、田尻啓、門司港から熱河丸で大連に行き、満鉄で実習。奉天で島尾敏雄と落ち合い、檀一雄とも会って帰国。	20日、県教育会館で福岡洋裁文化協会の発会式、火野葦平が講演。
8月	5日(火)、**「こをろ」第8号発行**。編輯兼発行人は矢山哲治。発行所は福岡市春吉下寺町339ノ2矢山方「こをろ発行所」。全67頁。6日(水)、市内住吉池畔のバス停に集合し、男女の仲間で筑紫耶馬渓にピクニック(※予定、矢山哲治、昭和16・8・3鳥井平一宛書簡)。	下旬、島尾敏雄、市内靖国町384荻野政朋方(陸軍墓地の近く)の下宿に移り、千々和久彌と共同生活を開始。ここ	警視庁、都内の婦人雑誌50数誌を16誌に統合。30日、「翼賛福

				「こをろ通信」第六号発行。同人費(「友達会費」)を9月から毎月4円に値上げ決定。小見山敦子、「友達」参加(小見山里子推薦)。24日(日)、「福岡友達会」開催。源憲彰(京大哲学科、島根県出身)、「友達」参加(阿川弘之・佐藤昌康推薦)。30日(土)、「福岡友達会」開催。小山俊一、「友達」参加(松井太一推薦)。「こをろ」の「編輯印刷を東京側友達に移す」ことを検討。
9月	8日(月)、眞鍋呉夫句集『花火』出版記念会開催。15日、**「こをろ」第9号発行**。編輯兼発行人・発行所は前号に同じ。全69頁。巻頭に「友達」一覧(計28名)。20日(土)夜、東京中野「明治屋」で「東京友達会」開催。出席者は阿川弘之・佐藤昌康・藤三男・鳥井平一・吉岡達一。古賀正三(東大農科農芸化学科)、「友達」参加(佐藤昌康推薦)。24日(水)夜、市内春吉下寺町の矢山哲治宅にて「福岡友達会」開催。出席者は海法昌裕・山下米三・小山俊一・冨士本啓示・矢山哲治・島尾敏雄・福田三千也・千々和久彌・田尻啓・村橋多真雄。27日(土)午後6時30分、東京中野「明治屋」で「東京友達会」開催。出席者は阿川弘之・佐藤昌康・藤三男・鳥井平一・眞鍋呉夫・吉岡達一・古賀正三。午後9時散会。この月の下旬、「こをろ通信」第七号発行。「友達住所録」(9月19日現在、計29名)付載。28日、「こをろ東京通信」第2号発行。	10日(水)、眞鍋呉夫句集『花火』(こをろ発行所)上梓。16日(火)、村橋多真雄、応召(のち召集解除)。小見山敦子・里子、長崎市南山手町26番地浜口方に転居。田尻啓、市内西職人町70野見山方に転居。玉井千博、箱崎新屋敷町海華苑アパート14号に転居。この頃、古賀政久、市内呉服町の「共進亭ホテル」で結婚式、畑山市長が媒酌人、矢山哲治も出席。	15-20日、福岡市天神町のデパート「岩田屋」で「総合文化展」(福岡地方文化聯盟主催)開催。「こをろ」7冊・詩集『友達』出品。情報局、映画製作会社10社を松竹・東宝・大映3社に統合。音楽雑誌を6誌に統合。15-18日、尾崎秀実・ゾルゲ検挙。16日、大学・高専の修業年限短縮を決定。18日、東條英機内閣成立。	は以前、伊達得夫が住み、「次郎長の家」と障子に大書していた(注32)。	岡」創刊。
10月	3日(金)、「こをろ通信」第八号(原題は「こをろ通信福岡版　第八号」)発行。13日(月)夜、「こをろ」第10号の編輯を「東京友達」が担当し、佐藤昌康・吉岡達一・阿川弘之・鳥井平一・藤三男・古賀正三が眞鍋呉夫宅に集合。17日、「こをろ東京通信」第3号発行。		1日(土)、矢山哲治、夜行で長崎(熊本・菊池・長崎)へ旅行し、4日帰福。17日(月)、矢山哲治、関西旅行に出かけ、京都・奈良を廻って24日(月)に帰福。			
11月	9日(日)、矢山哲治・島尾敏雄・冨士本啓示・福田三千也ら、山崎邦栄・山崎邦歌・久我正子らと立花山へハイキング(注33)。13日(木)夕刻、矢山哲治・島尾敏雄、福岡署特高課刑事と会談。17日、「こをろ東京通信」第4号発行。19日(水)、「福岡友達会」開催。出席者は松井太一・村橋多真雄・後藤健次・福田三千也・冨士本啓示・島尾敏雄・千々和久彌・海法昌裕・山下米三・大野克郎・小山俊一(矢山哲治は就職の件で上阪中、玉井千博は旅行中、川崎寿美男は欠席)。「福岡友達の多数が卒業入営などの為に福岡を去らなければならない」(「こをろ通信」第九号)状況について話し合う。20日(木)、「こをろ」第10号割付が東京から届き、九州印刷㈱に入稿。27日(木)、「こをろ通信」第九号(「こをろ通信　福岡版第九号」)発行。「こをろ友達住所録」(昭16・11現在)付載。		15日(月)、矢山哲治、第3詩集『柩』(こをろ発行所)上梓。			
12月	9日、矢山哲治・冨士本啓示、九大新聞部に所属していたので危険思想の嫌疑で特高警察の取り調べを受ける。14日(木)、「福岡友達会」開催。大東亜戦争開戦に際して「ひとへに、大詔にこたへんとの念願」(「記」)により第10号「再輯」の意見が提出され承認。					1日、興亜国民九州大会、福岡市で開催。8日、大東亜戦争開

年	月	事　項	同人（友達）消息	関連事項
		19日、「東京友達会」開催。「再輯」に反対。28日(日)、「福岡友達会」開催。東京代表として眞鍋呉夫が出席し、「再輯」に譲歩。29日(月)、東京にて海法昌裕出征壮行会開催。出席者は小山俊一・吉岡達一・阿川弘之・古賀正三・佐藤昌康・眞鍋呉夫。		
1942年 昭和17年	1月	2日(金)、同人通信「記」(眞鍋呉夫・福田三千也文責)配布。8日(木)、市内中洲のかき舟「かき福」にて矢山哲治・大野克郎(西部第51部隊)・冨士本啓示(小倉第114連隊)・山下米三(西部第48部隊)・小山俊一(軍属)の合同壮行会開催。	14、15日夜、矢山哲治、「平尾のH家」に行き、檀一雄・「コギトのN氏」・田尻啓らと歓談(※矢山哲治、昭和17・1・15書簡)。17日夕方、雪の日、矢山哲治・田尻啓・高岩忍、満洲へ旅立つ檀一雄を送る。31日、矢山哲治、吉岡修一郎・川上一雄・加野錦平らに見送られて入営先の久留米市へ。	始。12日、福岡県映画興行協会、米英映画の上演を自粛。20日、翼賛九州大会(第1回九州地方文化協議会)、福岡県庁で開催。
	2月	22日(日)夜、東京の眞鍋呉夫の下宿にて第10号編輯会議。出席者は吉岡達一・佐藤昌康・鳥井平一・藤三男・古賀正三・小山俊一・眞鍋呉夫。23日未明、「手紙に代へて―十号編輯その他のこと」(眞鍋呉夫記)発行。阿川弘之・源憲彰、同人辞退。24日(火)、「こをろ通信」第十号(原題は「こをろ福岡友達の消息」)発行。	1日(日)、山下米三(久留米西部第48部隊前田隊)・矢山哲治(久留米西部第51部隊(野砲兵)田中隊5班)・大野克郎(同前)・冨士本啓示、入営。佐藤昌康、杉並区上荻窪1-46沼野英不二方に転居。小山俊一、豊島区池袋3-1545藤森方に転居。眞鍋呉夫、中野区宮園4-4牧野玄達方に転居。福田三千也、福岡市箱崎汐井町4105-61に転居。鳥井平一、中野区中野駅前14中野荘に転居。玉井千博、福岡市馬出大仏通4丁目森下方へ転居。	2日、毎月8日を大詔奉戴日と決定。
	3月	1日(日)、「こをろ」第11号原稿締切。25日(水)、**「こをろ」第10号発行**。編輯兼発行人・発行所は前号に同じ。全85頁。	この頃、志佐正人・海法昌裕、応召(「こをろ」第10号編輯後記)。	1日、大日本翼賛壮年団福岡県団結成。2日、大日本婦人会結成。11日、日本少国民文化協会発足。21日、日本出版文化協会、全出版物の発行承認制を決定(翌4月から実施)。

4月	6日(月)夕方、「ブラジレイロ」で台北帝大に行く後藤健次の送別会をかねて「福岡友達会」を開催する予定だったが、島尾敏雄と福田三千也しか集まらず流会。9日、「こをろ福岡友達の消息」(「こをろ通信」第十一号)発行。19日(日)、佐藤昌康の下宿で「東京友達会」開催。出席者は小山俊一・古賀正三・佐藤昌康・千々和久彌・藤三男・吉岡達一。20日、**「こをろ」第11号発行**。発行人は玉井千博、編輯人は島尾敏雄(福岡市箱崎網屋町御茶屋跡四の組藤野慶次郎方)、発行所は福岡市馬出大仏通4玉井千博方「こをろ発行所」。全82頁。23日、「こをろ東京通信」第5号発行。	千々和久彌、福高文甲から東大国文科に進学。猪城博之、福高文乙から九大法文学部文科に進学。4日、福田三千也、九州日報社を退社し、25日(土)、久留米市の西部第48部隊に入営。4月臨時徴兵検査の結果、鳥井平一・佐藤昌康、第二乙種合格。小見山姉妹・十時賀子、上京。福田三千也第一創作集『銀河』上梓(「こをろ」第11号広告)。	1日、九州内4電力会社統合し、九州配電㈱発足。10日、劉寒吉『山河の賦』(六芸社)。18日、福岡市に初の空襲警報。庄野潤三、九大法文学部に入学し、東洋史学科を専攻。
5月		眞鍋呉夫、応召し、下関市の西部第74部隊静原隊保里班に配属。24日(日)、檀一雄、市内住吉の中華料理店「太閤園」で高橋律子と結婚式、高岩家と親しかった田尻啓も出席。	26日、日本文学報国会創立。この月、金属回収令により寺社の仏具・梵鐘を強制供出。
6月	20日(土)、「こをろ通信」第十二号発行。	6日(土)、矢山哲治、久留米陸軍病院(17ノ3)に入院。後藤健次、台北市古亭町206八光会館内。山下米蔵、中支派遣軍9465部隊駒形隊。福田輝夫、久留米西部第48部隊山本隊3班。古賀政久、福岡市渡辺通に転居。小山俊一・千々和久彌、東京市本郷区駒込西方町10番地ほノ16号及川方に転居。十時賀子、同人辞退。	5日、ミッドウェー海戦開始。
7月			
8月		眞鍋呉夫、教育召集から臨時召集となり、豊予要塞重砲兵連隊芹崎砲台(大分県南海部郡下入津村)に転属。	10日、「福岡日日新聞」「九州日報」統合し「西日本新聞」創刊。
9月		眞鍋呉夫、大分県佐賀関沖の高島(無人島)に配置となり、敗戦まで駐屯。25日(金)、阿川弘之、東大を繰上卒業。海軍予備学生を志願し、30日(水)、	

年	月	事項	同人（友達）消息	関連事項
			佐世保第1海兵団に集合。兵科第2期予備学生として台湾高雄州東港海軍谷本部に配属。佐藤昌康、見習尉官（軍医）として朝鮮元山航空隊に配属。川上一雄、九大法文学部を卒業。	
	10月		5日（月）夜、矢山哲治、現役免除で陸軍予備役一等兵となり帰宅。鳥井平一、熊本の西部第16部隊に入営。百田耕三、除隊。	1日、既存5社合併し西日本鉄道㈱開業。
	11月			2日、北原白秋没。
	12月	30日（水）、**「こをろ」第12号発行**。編輯兼発行人は眞鍋呉夫、発行所は福岡市高宮本町58眞鍋方「こをろ発行所」。印刷所は宇都宮市石町882弘明館印刷所（以後、終刊まで同じ）。全56頁。		
1943年 昭和18年	1月		29日（金）午前6時30分頃、矢山哲治、西鉄大牟田線の薬院―平尾間踏切で轢死。この頃、佐藤昌康、築地の海軍軍医学校に。	20日、黒田静男評論集『文化翼賛』（錦城出版社）。
	2月	6日（土）、市内鍛冶町の高円寺で矢山哲治の葬儀。島尾敏雄が弔辞を読み、小山俊一・吉岡達一が東京から来て参列した。		23日、陸軍省「撃ちてし止まむ」ポスター5万枚配布。
	3月			7日、大日本言論報国会結成。この月、野球用語の日本語化決定。岩田屋で「大東亜戦争美術展」開催。
	4月		田尻啓、陸軍雇員としてパレンバンに従軍。	
	5月		小山俊一、陸軍雇員募集に応募。	
	6月	10日（月）、「こをろ」第13号校了。20日、**「こをろ」第13号発行**。「矢山哲治追悼」特集。編輯兼発行人は眞鍋呉夫（東京市豊島区駒込6丁目766吉岡方）、発行所は東京市豊島区駒込6丁		25日、「学徒戦時動員体制確立要項」を決

							1944年 昭和19年
7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	
目766吉岡方「こをろ発行所」。全68頁。 4日(日)、「東京友達」相談し、来年10月第14号を出して「こをろ」終刊を決定。「こをろ東京通信」第6号発行。「こをろ友達住所名簿」を付載。							
10日(土)午後、九大医学部・附属医専、卒業試験終了と出征を祝う学士鍋を開催。 夏、庄野潤三・島尾敏雄、大阪府堺市の伊東静雄宅を訪問。 1日(水)、島尾敏雄、『幼年記』(こをろ発行所)上梓し、月末に九州帝大を繰上卒業。 島尾敏雄・福田正次郎・千々和久彌、海軍予備学生を志願し、それぞれ旅順海軍予備学生教育部・土浦海軍航空隊・江田島海軍兵学校に入隊。19日(火)午後1時30分、九大、出陣学徒壮行会を九大運動場で挙行。 猪城博之・湯川達典ら、アサ会の田中遵聖師からバプテスマを受ける。 福田正次郎、江田島の海軍兵学校国語科教官に。	15日、博多―釜山航路開設。 8日、イタリア無条件降伏。	19日、福岡市で「無法松の一生」(大映)試写会。21日、神宮外苑で出陣学徒壮行会。27日、中野正剛割腹自殺。	5日、東京で大東亜会議開催。23-25日、肥筑平野で久留米師団秋季大演習。	24日、政府、徴兵適齢年齢を19歳に短縮。25日、「九州文学」同人の田中稲城没。庄野潤三、繰上卒業し、広島の大竹海兵団に入隊。	1日、「月刊西日本」(西日本新聞社)創刊。15日、秋山六郎兵衛『白刃の想念』(明光堂書店)。30日、福岡市		

年	月	事項	同人（友達）消息	関連事項
				で文化報国会発会式。
	2月		島尾敏雄、第1期魚雷艇学生となり、横須賀の海軍水雷学校をへて川棚臨時魚雷艇訓練所に入所。	7日、学徒勤労動員の通年実施を決定。20日、矢野朗『生炎』（泰光堂）。21日、勝野ふじ子没。
	3月			「九州文学」、「特輯兵営生活」。11日、市内で女子挺身隊決起大会に1000名以上動員。24日、火野葦平、雁ノ巣飛行場から前線に出発予定のところ欠航がつづき中止。
	4月	30日(日)、**「こをろ」第14号発行**。編輯兼発行人は眞鍋呉夫（東京都世田谷区北沢1丁目1301吉岡方）、発行所は東京都世田谷区北沢1丁目1301吉岡方「こをろ発行所」。「あとがき」に「本号を以て、第一次こをろ不定期休刊とすることを、既に遠くにあつて戦つてゐる各同人にお伝へする」とある。「当時、僅に音信を保ち得た数人の友達は、九州防衛のため、その周辺にあつた。即、奄美大島の島尾敏雄、出水の佐藤昌康、大村の吉岡達一、四国の鳥井平一、福岡の一丸章であつた。(他に三重に千々和久彌、八丈島に海法昌裕、東京に小見山姉妹のあることを知るのみだつた。)」（眞鍋呉夫「『こをろ』復刊計画草案」昭21・1・1）		

若杉山頂にて
向かって右から眞鍋呉夫・久我正子・山崎邦栄・冨士本啓示・奥村秀子・田尻啓・山崎邦歌・島尾敏雄

山崎邦栄(右)・邦歌(左)

九大在学中の島尾敏雄(左から２人目)

島尾敏雄と弟妹たち
右から義郎・敏雄・美江・雅江

注

1 **川上一雄**　大正6年10月15日、福岡市生まれ。御供所小学校、福岡商業学校、長崎高等商業学校をへて、昭和17年9月、九州帝国大学法文学部経済科を卒業。三菱鉱業および同子会社に勤務し、定年退職。「十四世紀」「こをろ」「午前」に小説を発表。晩年は腎不全のため人工透析治療に通院。療治の日々を描いた創作『水の反映』（福岡・桃滴舎、昭58・9）を上梓。昭和61年2月没。

2 **鳥井平一**　大正8年9月23日、戸畑市の生まれ。小倉中学で星加輝光と同級。昭和13年6月、福高3年生のとき矢山哲治と知り合い、14年春、福高文乙を卒業し東大法学部に入学。矢山哲治のよき理解者で、矢山哲治の第2詩集『友達』の造本を手がけた。17年10月、出征。翌年、陸軍経理幹部候補生試験に合格し、熊本市から新京に赴任した。戦後は東京で第一銀行に勤務。東京都在住。

3 **佐藤昌康**　大正8年11月7日、長崎県大村市の生まれ。昭和14年3月、福岡高校を卒業し、17年9月、東大医学部医学科卒業。21年12月、東大立地自然科学研究所研究嘱託となり、22年9月、同助手。27年3月、東大医学部助手。以後、群馬大学前橋医科大学助教授をへて、29年2月、熊本大学医学部教授。51年7月、東京都専門理事東京都神経科学総合研究所長（61年3月まで）。同年9月、熊本大学名誉教授。61年11月、財団法人ブレインサイエンス振興財団理事長。平成9年8月11日没。没後、遺稿集『過ぎ去った日々』（私刊、平10・8）上梓。

4 **安河内剛**　「大正六年十一月三十日、福岡に生る。父、義夫。母、春枝。三姉一妹あり。大名小学校、中学修猷館、福岡高等学校理科乙類を経、東北帝国大学理学部物理学科在学、昭和十六年三月拾日没。法名、釈洞信士。境遇の変遷に幼少よりの順良な生育を損じなかつた。雅稚を失はなかつた。中学時代、理科研究部員で短長波受信器などつくり、後ラガーになつて活躍してゐた。Yakko-San の愛称にからんですべての友人知己の忘れ得ぬところだらう。」（「安河内剛小歴」、「こをろ」第7号、昭16・6）

5 **小山俊一**　大正8年3月13日、福岡県門司市の生まれ。2男3女の第2子。直方市に育ち、福岡高校をへて昭和16年12月、九大農学部卒。昭和18年5月、陸軍雇員募集に応募し、同年6月、軍属として東京を出発。ボルネオのジャングルで敗戦を迎えた。戦後は「こをろ」同人の小見山敦子と結婚。東京・紀州田辺・松山と移り住んだ。中学教師を13年間つとめたあと退職し、個人誌「EX-POST通信」「オシャカ通信」「プソイド通信」「アイゲン通信」「Da通信」を発行。平成3年9月18日、松山市にて死去。享年72。

6 **冨士本啓示**　大正8年5月生まれ。本籍地は福岡県企救郡曽根町下曽根（現・北九州市小倉南区下曽根）。6人兄妹の第2子。下曽根小学校、小倉中学、長崎高商をへて、九大法文学部経済科（のち文科・仏文に転科）卒。戦時中は北朝鮮で軍隊生活を送り、元山で敗戦。ソ連軍に拉致されてシベリア抑留。昭和24年に復員。昭和41年、抑留体験を「前歴者」と題して「文芸」に発表。

7 **伊達得夫**　大正9年9月10日、旧朝鮮の釜山の生まれ。昭和2年4月、京城府南大門小学校に入学し、8年4月、京城中学に進学。同級生に磯永秀雄がいた。13年4月、旧制福岡高等学校文科乙類（ドイツ語クラス）に入学。同級生に猪城博之・福田正次郎（那珂太郎）・湯川達（達典）らがいた。2年生の終り頃、クラス雑誌「青々」を創刊（昭和21年、第5号で終刊）。16年3月、福高を卒業し、4月、京都大学経済学部に進学。18年9月、京大を繰上げ卒業。家族のいる京城に戻り、翌19年2月、静岡連隊に入営。北支派遣となり、内蒙古に向かった。5月、幹部候補生試験に合格し、北支を転戦。20年6月、陸軍倉庫の経理官（見習士官）として岐阜県加茂郡加茂村の軍需品集積所に着任し、ここで敗戦を迎えた。21年1月25日、復員し、やがて前田出版社に就職。23年2月、書肆ユリイカを創業。福田正次郎（那珂太郎）の第1詩集『ETUDES』（昭25・5）の出版を契機に詩書中心の出版社として戦後詩の興隆に貢献した。36年1月16日没。（長谷川郁夫「われ発見せり　書肆ユリイカ・伊達得夫」書肆山田、平4・6）

8 **星加輝光**　大正9年2月17日、福岡県門司市大字門司3108番地に生まれた。小倉中学では冨士本啓示と同級。昭和12年、長崎高商に入学。在学中は校友会誌「扶揺」、映画研究会機関誌「映画軌線」、俳誌「漣」を編集。同校

在学中の森澄雄（昭和15年4月、九大法文学部経済科に進学）とは俳句仲間だった。15年春、卒業して王子製紙に入社。応召して久留米西部第51部隊騎兵部隊に入営し、南支に従軍。ついで東京の陸軍経理学校歩兵隊経理室、さらに久留米歩兵連隊へと移った。20年、復員帰郷。門司鉄道管理局に入社し、50年退社。「真船豊論」で昭和23年度九州文学賞。「こをろ」「九州文学」「九州作家」「公園」などに同人参加。著書に『小林秀雄ノオト』（梓書院、昭54・6）『北九州の文学―火野葦平とその周辺』（梓書院、平13・2）がある。北九州市門司区在住。

9

廣瀬信子　大正7年、福岡市の生まれ。福岡市立春吉尋常小学校で矢山哲治・加野錦平・中村健次らと同級生（同校第22回【昭和6年3月】卒業記念アルバムによると、学年全体で4クラスあり、矢山哲治・加野錦平・中村健次は「二之組」【男子クラス66名】、廣瀬信子は「三之組」【女子クラス72名】。矢山哲治は福高に、中村健次と加野錦平は福岡商業に進学、福岡商業では川上一雄・百田耕三が同級生、眞鍋呉夫は一級下）。県立福岡高等女学校では山崎邦栄と同級生。九大仏教青年会附属日曜学校の活動に参加し、そこで矢山哲治とも親しくなった。父親は九州帝大工学部造船学科教授。自宅は福岡市野間畠田610。高宮駅近くの高台に軍艦式設計の家を構え、当時は珍しいピアノや水洗トイレがあった。市郊外の奈多（祖母の里）には廣瀬家の別荘があり、こをろ同人たちとも一緒に遊んだ。昭和15年10月末、数えどし23歳のとき結婚し、柴田姓となる。福岡県大野城市在住。

10

山崎邦栄　大正8年2月3日、福岡市の生まれ。県立福岡高等女学校卒。山崎国彦（明治15（16？）年11月3日生まれ、ワカ（和歌、昭和11年3月16日没。享年49歳）の第5子。4男4女で、順に邦雄・邦隆・邦子・邦福・邦栄・邦歌（大正11年1月25日生まれ）・邦代・邦泰。姉の邦子は神戸に嫁いだが、夫の勝治はサイパンで戦死。邦福は西南学院高等部卒で文学好き、島尾敏雄と仲良しだったが、昭和26年頃に早世した。父親は当時、福岡警察署長。妻の死後、後妻を娶った。自宅は市内西公園下の東通町にあったが、昭和10年頃、大濠公園傍の大濠町の住居（福岡気象台の隣）に移転。その後、強制疎開で市内荒戸三番町に引っ越し、20年6月19日の福岡大空襲で自宅は焼尽した。戦後は市内の聖福寺境内に設けられた引揚孤児収容所「聖福寮」（のち「聖福子供寮」「いづみ保養園」と改称）で38年6月まで保育に携わり（※近藤洋太『矢山哲治』）、その後、九大乳児院、私立春吉保育園に一時勤めたあと、新設の国家公務員共済組合立「東京保育所」に移り、上京。昭和56年3月、定年で退職後、帰福した。平成11年5月1日没。

11

鈴木真　大正7年10月20日、福岡市浜口町の生まれ。父親は九大農学部気象学教室教授の鈴木清太郎（香川県出身）。この関係で矢山哲治は福高を一年留年後に九大農学部農学科に入学し、鈴木教授のもとで農業気象学を専攻した。鈴木真は矢山哲治と県立中学修猷館で同級生、二人とも同校を昭和10年3月に四修で了え、同年4月、福岡高校理科甲類に入学。13年4月、九大工学部に進学し、同校を卒業。現在は千葉県柏市在住。

12

安永妙子　大正8年1月5日生まれ。昭和11年3月、県立福岡高等女学校卒。18年1月14日結婚。同月12頃上京。現姓・柏崎。福岡市在住。なお、安永妙子、廣瀬信子、山崎邦栄、松丸静子、岡本咲子、梶本富子らは、女学校時代の同級生。

13

秋根美代子　大正10年6月15日生まれ。生家は福岡市下新川端町の呉服商「まるた屋」。昭和14年3月、私立福岡女学校卒。現姓・羽室。なお、山崎邦歌、寺野久子（大正10年9月20日生まれ）、原田信子（大正10年10月11日生まれ）、久我正子、田中幸代（大正10年12月8日生まれ）は同級生。井上みゆきは一級下。

14

久我正子　大正11年1月29日、福岡市の生まれ。私立福岡女学校（現・福岡女学院）卒。昭和20年2月、眞鍋呉夫と結婚。生家は市内黒門にあった和菓子店「江戸屋」。川端町にも店舗があり、市内の工場やデパートに手びろく納品した。市南郊の油山の中腹に日本庭園造の「山水紅園」を所有し、「こをろ」仲間もここで遊んだ。

15

原田義道　大正5年7月生まれ。本籍地は長崎市出来大工町（のち本人が御船蔵に移す）。久留米市内の小学校を卒業し、中津中学、福岡高校をへて、九州医学部卒。戦時中は軍医（教官）。敗戦は佐世保にて。九州分院に勤務後、29歳で鳥取大学医学部へ。第三内科教授で退職。平成4年11月10（11？）日、癌のため死去。

16

「銀箭（ぎんせん）」 同人誌「十四世紀」創刊（昭13・2発禁）以前に、長崎高商の映画研究会のメンバーが中村健次の提案に呼応して創刊を計画した雑誌の名前。じっさいには創刊されなかった。当時の映研のメンバー、中村健次・冨士本啓示・志佐正人・島尾敏雄・星加輝光・囲時夫らは、市内加治屋町の喫茶店「銀嶺（ぎんれい）」にたむろしては談笑していたので、「銀」の文字を借用したという（星加輝光氏談）。「箭」は、矢の竹の部分、やがら、矢の意。

17

「こお（を）ろ通信」 ガリ版刷りの同人通信。タイトルは「こおろ通信。第二輯。」「こおろ通信。―第3輯」「こおろ通信―五月―」「こおろ通信　昭和十五年六月」「同人通信」「こをろ通信―9―」「こをろ通信　第四号」などと表記は一貫していない。復刻版「こをろ」（言叢社、昭56・9）別冊付録「こをろ通信」は、これを整理し、「こお（を）ろ通信」第1-9号、改組後は「こをろ通信」第一-十二号、「こをろ東京通信」第1-6号と呼称を便宜的に統一している。本稿も原則としてこれに従う。

18

同人住所別一覧

福岡市　一丸章（療養中）内村亨（日立製作所）小山俊一（九大農学部）大野克郎（九大工学部）加野錦平（大日本麦酒ＫＫ、のち竹中工務店）川崎寿美雄（ママ）（九大法学部）古賀政久（九大法学部）久保山巍（九大工学部）後藤健次（福岡高商）鈴木真（九大工学部）原田義道（九大医学部）牧野昌雄（九大医学部）眞鍋呉夫（日立製作所）矢山哲治（九大農学部）山下米蔵（日立製作所）吉岡達一（福岡高校）横倉弘吉（九大医学部）村橋多真雄（のち竹中工務店）

福岡県　原田和夫（福岡高商・福岡市外井尻）冨士本啓示（九大文学部・糟屋郡箱崎町）三浦愛雄（九州水力ＫＫ・浮羽郡羽犬塚町）星加輝光（長崎高商・門司市）

長崎市　川上一雄（長崎高商）島尾敏雄（長崎高商）囲時夫（長崎高商）星加輝光（長崎高商）

東京市　佐藤昌康（東大医学部）鳥井平一（東大法学部）

仙台市　安河内剛（東北大理学部）

川崎市　藤三男（日本鋼管ＫＫ）

京都市　楢崎恭三（京大法学部）

神戸市　中村健次（石原産業）

広島市　阿川弘之（広島高校）

京城府　志佐正人

北京市　上妻善一（国際運輸ＫＫ）

出征中　百田耕三（満洲派遣牡丹江省大城子軍事郵便所気付　川勝部隊田中隊）

※なお、創刊号掲載の「同人」一覧には、後藤健次（福岡高商）の名前が見えない。創刊号の入稿後に同人参加したのであろう。

19

「特高課の偉い人々とも、今朝やつと逢へた。／一週間無駄足を踏んだんだぜ。／『こおろ』といふ名と、俺の趣旨（ママ）にはひどく好意をもつてくれたらしいが、何分『新聞紙』の取締り、粛正の折から、それが一段落するまで発行をまつてくれ、あと半年ぐらゐといふ。そこで、恐る〳〵、申訳ありませんが、原稿と金とあつめ、印刷屋に渡してゐるからといふと、それでは『出版法』でこんど一回ぎり、あとは自発的に休刊にして、来年からするといふことにした。（俺が）／もう仕方がない、これ以上、相手に「2字空白」を刺激してはと考えて、改めてお話に参上しますといつて外に出た。／市役所の前で、どつちに行かうか、もう試験も始るが、ノオトは半年間空白だ。中州に出るにはハヤすぎると、ぼんやり、五分間も市役所の前にうろうろしてゐたら、うしろから『矢山さん』と課の者が追つて来て『君は、九大新聞』にゐるか、それなら話したいといふ者がゐるのでと、つれもどされて、また少し話をした。お茶のみ話程度だ。／そしてゐたら、雑誌係氏は、さつきのやうな事情だが、まあ、当分、『出版法』（新聞紙法にあらず）で出してみなさい、内容によく注意して、僕らにもよく読ませて下さいと、云はせたのである。／卯兵ヱよ、／『出版法』によつて、同人雑誌を出すことを日本は許しており、僕らの発起もこれによつておこツタ。未だ、如何なる束縛的法令も出てゐないことは、ありがたいことである。」（矢山哲治、昭14・10・2（推定）川上一雄宛書簡）

20

矢山哲治の昭和14・10・13鳥井平一宛書簡に、「昨日、東京から指令が来

て、川上君の小説、六五–七二頁カツトになりました。『こおろ』の前途多事多難ですね」とある。

21

中村健次　大正8年1月、福岡市の生まれ。春吉尋常小学校、福岡商業学校をへて長崎高等商業学校卒。長崎高商時代は、島尾敏雄が旧知の金森正典（神戸市在住、沖縄戦で戦死）と昭和12年6月に創刊した同人誌「峠」（第3次）に、川上一雄・土師二三生らと参加。「峠」は2号を出して解散したが、同年夏、小学同窓の矢山哲治と再会し、福高・長崎高商生合同の同人誌の発刊を企画。翌年2月、「十四世紀」を創刊したが、即発禁となった。14年、長崎高商卒業後は石原産業（神戸市）に就職。15年夏、陸軍経理学校甲種幹部候補生試験に合格して上京。昭和16年4月、広東駐屯の第18師団（菊兵団）に主計将校として配置となり、マレー・ビルマ作戦に参加。19年5月以降、歩兵第55連隊（大村編成）付としてビルマ各地を転戦し、シッタン河下流にて敗戦。21年7月、帰国の日に戦犯容疑（冤罪）でラングーン刑務所に収容され、22年8月、佐世保市郊外の南風岬に復員。29年、三菱金属鉱業㈱、48年、マルフク産業㈱に勤務し、平成3年、同社顧問を最後に退社。著書に『ラングーン刑務所―ある戦犯容疑者の回想』（東峰書房、昭63・10）『戦友』（私刊、平8・11）がある。平成9年4月25日没。遺稿『私の青春アルバム（長崎時代の仲間たちと）』（有文社、平13・4）がある。

22

猪城博之　大正10年9月21日、福岡市上新川端町61番地に父・猪城秀夫、母・久の第4子として生まれた（出産は九大附属病院産婦人科）。生家は明治23年創業の博多活版所（大東亜戦争中に児玉印刷所と合併し、戦後に廃業）。冷泉尋常小学校、福岡中学（四修）をへて昭和13年4月、福岡高校文科乙類に入学。二年生のとき留年し、17年3月卒業。同年4月、九大法文学部文科（哲学）に入学。在学中は湯川達典らと聖書研究会を組織し、アサ会（現・アメンの友）の河野博範師から指導を受け、18年11月、湯川達典ら4人で一緒に田中遵聖師（田中小実昌の父親）からバプテスマを受ける。同年12月、仮卒業し、陸軍歩兵第24連隊（福岡市）に入隊。肺結核に罹患。19年4月、久留米市の陸軍予備士官学校に入学。卒業後、同年8月、肺結核のため久留米陸軍病院に入院。部隊は南方戦線に向かい壊滅。20年3月末、除隊。敗戦の翌年、西南女学院短大に半年間ほど勤務し、21年10月、九大大学院に入学。特別研究生となり月75円の官費支給を受け、26年秋、西南学院大学に奉職。43年、九大教養部に移り、60年3月定年退職。福岡市在住。

23

福田正次郎（那珂太郎）　大正11年1月23日、福岡市麹屋町の生まれ。祖父は藤井孫次郎（弘化4・9・27–明40・9・16）。藤井孫次郎は筑前国博多上呉服町の呉服商の3男。明治10年3月、「筑紫新聞」の創刊に参画し、同紙廃刊後の翌11年12月、「めさまし新聞」（のち「筑紫新聞」・「福岡日日新聞」・「西日本新聞」）を創刊。父は孫次郎の次男の酒井清三。正次郎は8人きょうだいの5番目。生後半年ほどして福田家へ養子に行き、酒井姓から福田姓となった。昭和3年、奈良屋尋常小学校に入学し、3年生の途中で住吉尋常小学校に転校。福岡中学（四修）、福岡高等学校をへて昭和16年4月、東大文学部国文科に入学。18年9月、繰上げ卒業し、翌月、海軍予備学生（第3期）として土浦海軍航空隊に入隊。同年12月、江田島の海軍兵学校の国語科教官となり、昭和20年4月、長崎県針尾に新設された海軍兵学校分校に転属。同校の疎開先の山口県防府で敗戦を迎えた。いったん帰郷し、上京。都立第十高女（のち豊島高校）・新宿高校（定時制）で教壇に立ち、48年、玉川大学助教授（翌年、教授）。第一詩集『ETUDES』（書肆ユリイカ、昭25・5）以下、多くの詩集・評論集を上梓。

24

住所録（十五年四月改訂）　※福岡市総合図書館所蔵（一丸章寄贈資料）・復刻版「こをろ通信」未収録

阿川弘之（東大国文科）東京市杉並区荻窪三丁目　三松荘内／一丸　章（［空欄］）福岡市姪ノ浜町生ノ松原　九大分院内／岩井敏光（［空欄］）福岡県田川郡後藤寺本町三丁目／猪城博之（［空欄］）福岡市川口町／内村　亨（日立製作所）福岡市行町二四番地／小山俊一（九大農科）福岡市吉塚西林寺町／大野克郎（九大工学部）福岡市蓮池町／加野錦平（竹中工務店）福岡市春吉花園／川上一雄（九大法文）福岡市馬場頭六三二番地／川崎寿美雄（入営中）福岡市大沢部隊野見山隊第一班／久保山巍（九大工学部）福岡市新簀島天神森／古賀政久（九大法学部）福岡市渡辺通一丁目／上妻善一（国際運輸）北京市宣武門大街二三八国際宣武寮二八号／後藤健次（福岡高商）福岡市大橋平木／

古賀正三(九大農学部)福岡市東唐人町海岸通二丁目／島尾敏雄(九大法文)福岡市地行東町四番丁ポスト前　恒屋方／中村健次(入営中)／鈴木　真(九大工学部)福岡市鳥飼町三丁目一九四／囲　時夫(〔空欄〕)東京市芝区本芝二丁目九　田中方／志佐正人(〔空欄〕)京城府南山町二ノ三二　富田屋内／中野睦夫(〔空欄〕)北京市西安長街華北電信電話公司経理部会計課計算係／鳥井平一(東大法学部)東京市中野区打越四八　林方／原　介夫(九大医学部)福岡市東薬院二番町四五ノ一　宇野方／原田義道(九大医学部)福岡市簀子町一四一／原田和夫(〔空欄〕)大阪市住吉区田辺西町七丁目二〇／平山吉璋(長崎高商)長崎市西中島町九九／三浦愛夫(九州水力電気)福岡県羽犬塚町九水羽犬塚営業部／村橋多真雄(竹中工務店)福岡市草ケ江八番地／星加輝光(〔空欄〕)門司市元清滝町一番地／富士本啓示(九大文学部)福岡市箱崎町網屋町お茶屋跡　藤野方／藤　三男(日本鋼管)川崎市渡田山王町八四　岡部方／福田正次郎(〔空欄〕)福岡市簀島南小路／船津純彦(九大医学部)福岡市宮崎町住吉橋際／百田耕三(出征中)満洲派遣牡丹江大城子軍事郵便局気付川勝部隊田中隊／守島　治(京大法学部)京都市左京区岡崎里谷町一　田村方／矢山哲治(九大農学部)福岡市春吉上寺町三二九　藤村方／安河内剛(東北大理学部)仙台市木町末無三三一号　菊池方／吉岡達一(東大農学部)東京市杉並区荻窪三丁目　西郊ロッジング内／眞鍋呉夫〔空欄〕福岡市大濠町一五六番地

25

田尻啓　大正9年、小倉市(現・北九州市)到津(いとうづ)の生まれ。中学1年の秋、父親が死去。昭和12年、福岡高校理科甲類に入学。在学中はバレーボール部に所属。同級生に高岩和雄(檀一雄の実母・高岩トミの義子、中学修猷館出身)がおり、この縁で和雄の異母弟・玄の家庭教師となった。15年4月、九大工学部応用化学科に進学。16年、檀一雄を識り、師事。福岡学生映画研究会メンバー。九大卒業後は軍属として南方に赴き、スマトラ派遣岡第1030部隊青木隊の一員としてスマトラ島のパレンバン製油所で就業。22年2月、引き揚げ帰国。三菱石油に勤務。東京都大田区在住。著書に『もがり笛の女―高岩トミと私』(菁柿堂、平3・2)『石油に散った火焔樹の花―ある陸軍徴員の従軍記』(菁柿堂、平5・4)『斜めの影―玉置明善との半生』(菁柿堂、平11・9)がある。

26

土師二三生　長崎高商卒。大阪毎日新聞東亜部記者。戦争中は、豪州とニューギニアの間にあるアラフラ海のケイヅラ島に配置された独立野戦高射砲第50中隊に所属。昭和63年10月、中隊戦史『ケイヅラ島戦記』(有文社)を上梓。

27

百田耕三　福岡商業学校で川上一雄・加野錦平・中村健次と同級。眞鍋呉夫は一級下。在学中は学友会誌に小説を発表。昭和12年、馬場頭(現・六本松3丁目)の川上一雄宅で矢山哲治を知った。昭和13年12月10日、福岡市の陸軍第24連隊に現役兵として入営。「こをろ」同人では最初の出征だった。14年5月、北満へ。15年12月、南支那へ。17年10月除隊。戦後は西日本鉄道㈱勤務。

28

「『こをろ』第四号は昨夜編輯を了つた。昼休みによく登つた裏手の丘陵につづく谷合にあるK君の家でだつたが、縁側に倚つて真下の暗い練兵場や大濠公園の照明をとほく眺め呆けて、次々に朗読される小説や評論の出来栄をうつつに聴いてゐたら、去年のいま時分のこと、たつた一人でやきもき創刊の企画を急いでゐたことなど自然になつかしく思ひだされて、三度目の正直とでも云へばよいのか、この四号はどうやら歩調が合ひさうだなと嬉しかつた。外部からの障害でないかぎり、内部から崩壊することはないといふ確信が、皆を捕へたのだと信じる。皆、興奮して明るく嬉しさうだつた。(略)雑務の方は小説を書くM君と、K君とが献身的にやつて来てくれたし、今後は交替でやることも旨くゆくだらうから心配はない。」(矢山哲治「手紙」、「こをろ」第4号、昭15・9)

29

千々和久彌(ちぢわきゅうや)　大正8年4月5日、福岡県遠賀郡香月(かつき)村(おんが)の生まれ。楠橋尋常小学校、東筑中学、福岡高校をへて、昭和17年4月、東大文学部東洋史学科に入学。本郷西片町の下宿に小山俊一と同居し、福田正次郎(那珂太郎)・小見山敦子・小見山里子・吉岡達一らが訪れた。18年10月、東大を休学したまま海軍予備学生(第3期、同期に島尾敏雄・福田正次郎らがおり、阿川弘之は1年早い第2期予備学生)を志願し、入隊。敗戦時は海軍少尉(ボツダム中尉)、三重県の海軍航空隊の教官だった。まもなく復員し、21年6月、西日本新聞社

に入社(正式採用は翌7月)。23年春から24年秋まで外信部記者として東京に滞在。24年12月、旧知の小山俊一の妹テル子と結婚。41年、福岡市内梅林(うめばやし)に自宅を新築。島尾敏雄とも親しい交遊があった。西日本新聞社の文化部長・資料部長などを歴任し、50年、定年(55歳)で同社を退職したあと、嘱託として同社校閲部に5年間勤務。その後、㈶九州大学出版会に3年間勤務。福岡市在住。

30

玉井千博　火野葦平の末弟。昭和15年春、松山高商から九大法文学部文科に進学。「玉井千博君は弟妹の多い火野さんの末弟で、若松中学、松山高商を経て九大の国文に進んだ頃、わたしどもの同人雑誌『こをろ』の同人となった。九大卒業後は九州造船に就職、松山時代からの愛人であった夫人との間に一児を設けたが、人一倍真摯な人柄であった同君は、ひとり安閑として国内に留まることを潔しとしなかった。そこで、幼年時代以来左手が不自由であったにもかかわらず、ついに軍属を志願して採用され、昭和二十年三月十三日、琉球部隊報道部要員として鹿児島を出港、折から激闘を伝えられる沖縄本島に向ったまま消息を絶った。後に届けられた戦死公報によれば、二十年六月二十日、軍司令部と共に摩文仁で玉砕したということになっているが、事実は沖縄への途中の海上で乗船と運命を共にしたらしい」(眞鍋呉夫「『桃太郎』のこと―火野葦平」、『雲に鳥』大和美術印刷出版部、昭56・4)

31

一丸章　大正9年7月27日、福岡市新柳町の生まれ。幼少の頃、両親と別れ、花街に暮らす伯母のもとで育った。昭和12年3月、福岡中学卒。戦後は詩誌「母音」「ALMÉE」等に参加。詩集『天鼓』(思潮社、昭47・6)で第23回(一九七三年度)H氏賞を受賞。昭和41年、福岡県詩人会の創立に加わり、48年から64年まで代表幹事をつとめた。第2詩集『呪いの木』(葦書房、昭54・5)。平成7年、地域文化功労者文部大臣表彰。平成13年、日本現代詩人会先達詩人顕彰。平成14年6月12日午後11時、膀胱癌のため福岡市内の病院で死去。享年81歳。

32

島尾敏雄の小説「月下の渦潮」(「近代文学」昭23・11)はこの「次郎長の家」を舞台にしたもので、「浜小根は大学に通い、木島は高等学校に通っていた。高等学校の生徒の木島が先ず此の家の離れに住むようになっていた。母屋には若夫婦にようやく歩き始めた子供と生れ立ての赤ん坊。夫は自分で株屋だと言っているが、何をして生活のたつきにしているのかよくは分らない。夫婦で一緒に胸の病気を持っていた」云々とある。「浜小根」は島尾敏雄、「木島」は千々和久彌がモデル。

33

「数日前の日曜、女友達をまじへたグルツペで、海や空港を見晴す暖い城蹟の丘陵に遠足をした。彼女達が私達の送別をしてくれたわけです。いろんなことが間近なので。／山頂の芝生で焚火などしてから、彼女達は千代紙の小冊子をめいめい取出して思ひがけぬ贈物をしてくれた。岸田國士：落葉日記の朗読。私達は腹葡つたり立木に凭れたりそれこそ神妙に聴いてゐました。／彼女達の個性がそれぞれのり移つて、すこしいたましさを私は感じた。／その日、いちにち、青空はよわく輝きみちてゐて、高積雲(aitocumulus)がアイスクリイムをちぎつたやうに漂つてゐた。／私は転んで秋陽の降りそそぐなかに、信頼、愛情、希望、幸福などとそんな空な文字を拾つてゐた。／美しい日和があとどのくらゐつづくか、誰も知つてはゐないでせうに。」(矢山哲治「栞草」、「芝火」昭17・1)「〇日曜、立花山の方へピクニツクした。娘達は、岸田國士の落葉日記を朗読した。愉しかつた。私はあとで花がたみをよんだ。夜になつて考へると、あのひと達のきれいなことがよくわかつた。その晩がいちばん愉しかつた。」(矢山哲治、昭和16・11・13鳥井平一宛書簡)

(はなだ・としのり　九州大学大学院比較社会文化研究院教授)